

# がん社会 を診る

中川 恵一

医学は進んでいるのに、がんで死ぬ人は増えています。一体、がん治療は進歩しているのでしょうか？ この質問に答えるのは、実は簡単なことではありません。

がんは細胞の老化といえる病気ですから、高齢化が進めばがん死亡数が増えるのは当然です。社会の高齢化の影響を排除して比較するには、「年齢調整がん死亡率」を使います。これは実際の社会のがん死亡率を、もし社会が1985年の年齢構成だったらと仮定した場合の死亡率に換算したものです。年齢構成の違いを気にせず、異なる地域や時代の間でがん死亡を公平に比較することができます。

わが国の年齢調整がん死亡率は国際的に高い水準ですが、90年代以降はゆるやかな減少傾向にあり、この10年では約15%も減少しています。

がん治療後の5年生存率も



## 治療の進歩確認は難しい

着実に向上しています。93〜95年に治療した患者の5年生存率は53・2%でしたが、04〜07年では68・8%にアップしました。だからといって、がん治療が進歩したとは言いきれません。検査法が進歩したり、がん検診の受診率が向上したりすれば、早期がんの比率が高くなり、全体の生存率もよくなるからです。比べるなら、同じ進行度（ステージ）の患者どうしで比較する必要があります。

早期がんであるステージ1の患者の5年生存率は、97年は89・7%。2007年は93・2%に上昇しました。ステージ2では77・9%から83・7%に、ステージ3は46・1%から53・6%になりました。転移を伴うステージ4では、12・0%から20・2%と増え、10年で着実に生存率は改善しています。

ただこれも、厳密には、がん治療が進んでいる証拠とはいえません。診断技術が進歩すると、治療が進歩しなくてもステージ別の生存率は向上するからです。以前はがんが脳に転移してもなかなかかわかりませんでした。CTなどがある今ではみつけられます。すると患者は早期がんではなくなります。小さな転移も見えますから、ステージ4の生存率もよくなります。

がん治療全体の進歩を確認するのは、容易ではありません。といって、個々の治療の有効性を確認できないわけではありません。この2つを混同しないことが重要です。

（東京大学病院准教授）

イラスト・中村 久美